委員提出資料１

当事者のライフステージに合わせた『手話言語』にかかる取組みについて

「乳幼児期・児童期」に考慮すべきこと

河 崎 佳 子

１．「ことばの発達」に関する心理学的な捉え方の変化

２．言語学の視点からみた手話理解が、手話獲得の考え方に与えた影響

３．ネイテイヴサイナー と 手話を第二言語とするサイナー　～それぞれの手話を尊重～

４．手話言語にかかる取り組みとしての「**乳時期～幼児期初期**　０－３歳頃」の支援

　　　　　～子どもが「手話を獲得する」「手話で育つ」環境を保障する～

◎ 対 親支援

情報提供：手話の紹介　手話を使う人々の紹介

「手話を学ぶ」機会の提供　：　手話講座　手話学習会　家庭訪問支援

きこえない乳幼児と「手話のあるコミュニケーションを体験する」機会の提供

* 対 子ども支援

「手話でやりとりする」体験の保障　→　愛着形成　認知発達　人格形成

「手話を獲得する」支援＝ネイテイヴサイナーになる機会を保障する

　「手話で成長する」機会の提供＝ネイテイヴサイナーとかかわる環境を保障する

５． 手話言語にかかる取り組みとしての「**幼児期中期～後期**　３－６歳頃」の支援

６． 手話言語にかかる取り組みとしての「**学童期前期　小学低～中学年**」の支援

＊「一次的ことば」としての手話から、「二次的ことば」としての手話へ

　（岡本1985）

７．手話言語にかかる取り組みとしての「**学童期後期　中～高学年**」の支援